

ごあいさつ



私は平成25年4月にこちらへ赴任するまでの約20年間、主に消化器外科の現場にたずさわってきました。そこでは病気とあまり縁のなかったふつうの人が、ある日を境にがん患者といわれるようになり、人生の転機を迎えていく場面の連続でもありました。

がんというものは一般に慢性の病気です。たいていは長く付き合うことになります。きわめて大雑把に言えば、手術だけで二度と再発しない人がいる一方、はじめの病状が軽くても、短期間に進行する人もいます。また十年後に再発というケースも少なくない。最初からその区別がつけばいいのですが、まだ上手に見分ける方法がありません。例えば抗がん剤によって、ごく一部のがんにおいては治ることがあり、近年では副作用対策の技術も進み、共存状態で数年維持できることも珍しくなくなりましたが、一般には延命治療でありませす。じっさいに治療をお受けになった方ならわかると思いますが、少し先の病状さえ予測が難しく、ひとによって結果や満足感に大きな差があるのが現状です。そのほかの治療もみんなを満足させるには至っていません。かれこれ半世紀、がん治療の進歩はまだこの繰り返しを越えられないでいます。

インフォームドコンセントは、医者が事実をありのままに説明し、患者さんに納得せず「損得勘定」をしてもらうやりとりです。ひとにはそれぞれ価値観があって、病気と「徹底的に戦いたい」という人もあれば「戦わずにすべてを受け入れよう」という人もある。がん治療というのはすなわち、患者さんの人生観そのものです。多くの人が、自らのがんの知らせを受けた時には心配ごとが一度に湧き起こり、まるで人生が突然漂流を始めてしまっ

たかのような気分に襲われるといいます。そして、医者の説明内容が今一つ飲み込めな
いまま、あたかも敷かれたレールに乗るように治療中心の生活を受け入れます。すすめら
れた通りの治療を受けなければ「見捨てられる」という心配をされる方もいらっしゃる。そ
れでも困難に耐えてがんばってついて行ったのに、あるとき「もう次の治療はむずかしい」
と言われれば、こんどは「見放された」と感じるのも無理はありません。いったい誰に相談
したらいいのか？

治療というものは人生の目的ではなく、毎日をよりよく生きるための手段にすぎません。
病気と闘うときには援軍となり、戦いを休んで穏やかに過ごすときにはそのお手伝いをす
るのが私たちの仕事です。治療の選択そのもののお手伝いもできるかもしれません。私
は、当院に緩和ケア科のあることは、「協同病院は患者さんを最後まで見捨てない」という
メッセージであると思います。緩和ケアは、あきらめた人のための治療ではありません。
がんのように付き合いの難しい病気とどう過ごしてゆくかを、診断を受けた最初の時点か
ら一緒に考えていく係です。私たちのホームページでは、緩和ケア考え方や取り組み、チー
ム医療の様子をご紹介します。

緩和ケア科 診療部長 橋爪正明